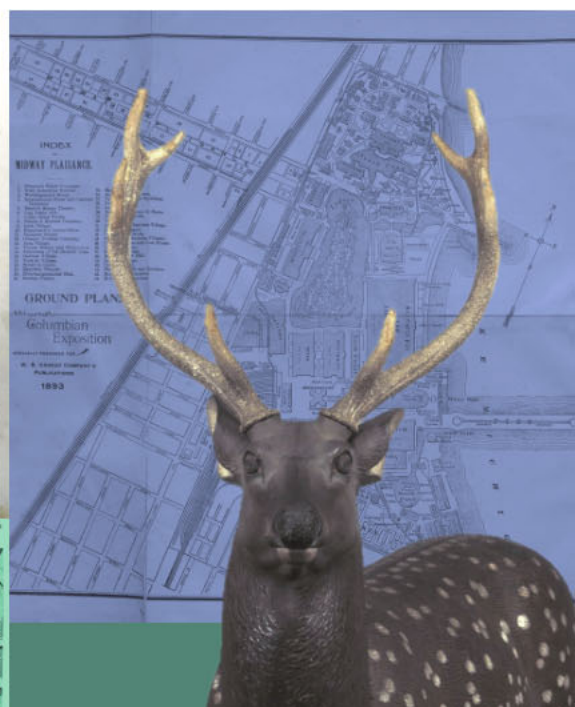
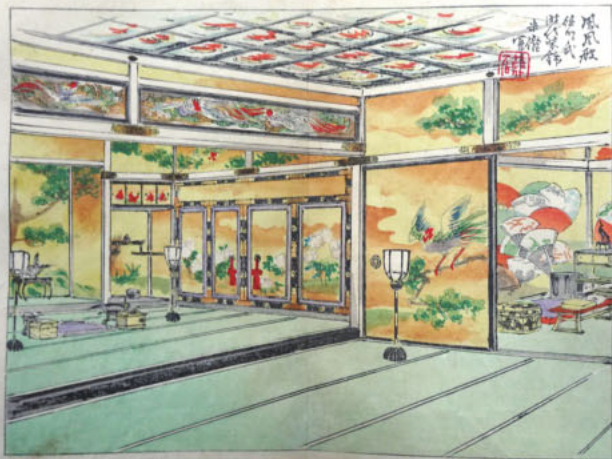


図書展示
博覧会のすゝめ
万博と奈良
― 鹿とみつめたシカゴ万博 ―



2025
5/1 (木) ~ 5/29 (木)

3階 図書展示スペース

ちょっと深めるシート

1. 博覧会―相教へ相学フ
- 2-1. 世界博覧会エ出品ノ件
- 2-2. 美術品及美術工芸品
3. 久保田米僊『閣龍世界博覧会美術品画譜』
4. 大塚卯三郎の報告

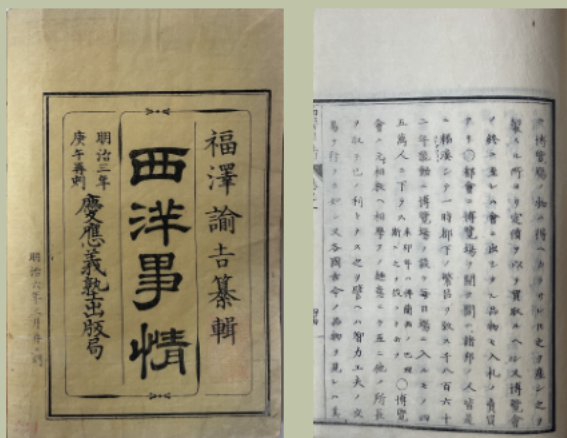


20th ANNIVERSARY
奈良県立図書情報館

ちょっと深めるシート①

1. 博覧会―相教へ相学フ

福澤諭吉は、文久2(1862)年、文久遣欧使節団の通訳としてヨーロッパに派遣されました。ヨーロッパ諸国を歴訪し、日本とは異なる文化や文明に刺激を受けた諭吉は、後に、著書『西洋事情』で数々の事象を紹介しています。その項目のひとつに「博覧会」がありました。



博覧会の項目

(福澤諭吉『西洋事情』初編 慶應義塾出版局 1863
請求記号:302.3- セイヨ-1 ID:151265224)

諭吉は、使節団の一行として、第二回ロンドン万国博覧会(1862年開催)を見学し、博覧会とは、「元々お互いに教え、学び合うという意味であり、互いに他国の長所を取り入れて自分たちの利益とする。たとえば、智力工夫の交易を行うようなものである」(「元ト相教へ相学フノ趣意ニテ、互ニ他ノ所長ヲ取テ己ノ利トナス、之ヲ譬ヘハ智力工夫ノ交易ヲ行フカ如シ」と述べています。

諭吉が述べるように、万国博覧会(以下、万博)は、最先端の技術が披露され、知的な国際交流がおこなわれる華やかな場でした。その一方で、同じ空間内に各国の展示物を並べて競合させるという、国家対国家の文化的な競争の場でもありました。



第二回ロンドン万国博覧会を視察する文久使節団
(『The Illustrated London News』)

諭吉が実際に見学した第二回ロンドン万国博覧会では、日本は正式出品せず、イギリスの初代公使オールコックが自身で集めた日本の品々を出品していました。そのめずらしさから、展示物は絶賛されたものの、使節団の一人淵辺徳蔵は『欧行日記』に「全く骨董店の如く」と嘆き、日本は博覧会の趣旨を理解せず、「如此粗物のみを出せしなり」と書き残しています。

近代化を目指す明治政府は、「日本」という国を世界に位置づけるための絶好の機会として、「万博」をとらえます。そのため、明治の早い時期から自国での万博の開催を目指し、世界各地で開かれる博覧会へも積極的に参加しました。また同時に国内での地方博覧会や内国勸業博覧会の開催も奨励しました。

【参考文献】

國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文 2010
(請求記号:606.91- クニタ ID:111180377)
佐野真由子編『万博学』思文閣出版 2020
(請求記号 606.9- サノマ ID:111351978)
日本史籍協会編『遣外使節日記纂輯』3
東京大学出版会 1987
(請求記号:210.08-364-98 ID:151087018) ほか

ちよつと深めるシート②

2-1. 世界博覧会エ出品ノ件

明治政府は、明治6(1873)年のウィーン万国博覧会にはじまり、過去数回の万博に参加してきました。当時の万博は、参加国が共通の分類にしたがって出品物を展示し、統一した基準で審査を受けることや出品物を販売することに重きがおかれていました。

明治23(1890)年元アメリカ公使館書記官ガワードが来日、シカゴ万国博覧会(以下、シカゴ万博)への参加が要請されました。
シカゴ万博は、コロンブス せかい はくらんかい 閣龍世界博覧会ともよばれ、コロンブスの「アメリカ大陸発見」400周年を記念して、明治26(1893)年5月1日から10月30日にかけて開かれた万博です。

参加要請を受け、第一回帝国議会の閉会数日前に緊急動議が提出され、参加のための追加予算が要求されました。



博覧会場見下シ図
(『臨時博覧会事務局報告附属図』臨時博覧会事務局 明28.5
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13706442> より改変)

当時、輸出額全体の三分の一以上が米国向けであったこともあり、米国への輸出のさらなる増加と、他国への販路拡大を目的として万博への参加を決めます。

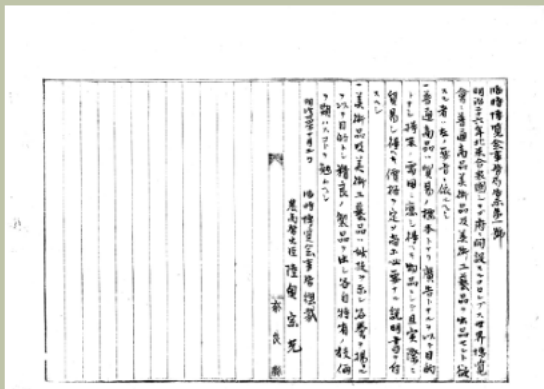
明治期の万博について、地方の動きはわからないことが多いのですが、当館では、シカゴ万博に関する行政文書を三冊所蔵しており、政府の決定を受けて、奈良県がどのように行政手続きを進めたのかがよくわ

かります。

明治24(1891)年6月5日、勅令第52号により臨時博覧会事務局官制が制定され、政府の組織として農商務大臣を総裁とする臨時博覧会事務局(以下、博覧会事務局)が設置されます。以後、第一条にあるように、博覧会事務局がシカゴ万博にかかわるすべての事務をとりおこなう(「コロンブス世界博覧会ニ関スル一切ノ事務ヲ掌ル」)ことになりました。

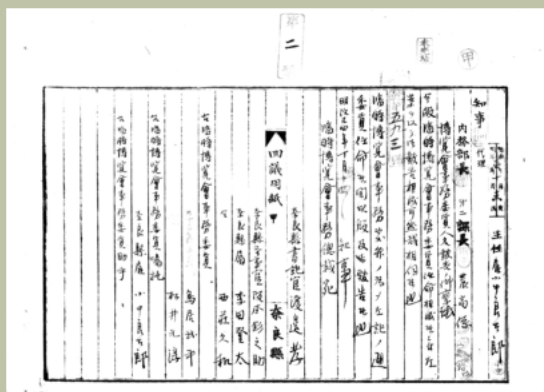
臨時博覧会事務局官制
(『自二十四年至二十七年博覧会一件』内務部第二課農商係
請求記号:1-M24-28d ID:556000800)

続いて10月には、博覧会事務総裁陸奥宗光の名前で、万博出品に際しての心得が告示されます。そこでは出品の基準を、(ア)普通商品は貿易の標本となり広告となるようなもの・将来の需要に応じることができ

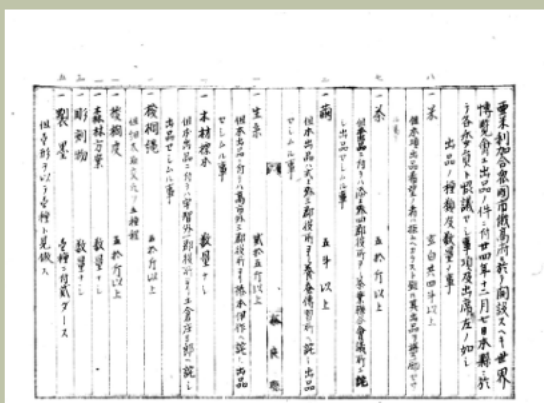


博覧会事務局の告示 (同上)

告示を受けた奈良県は明治24(1891)年10月14日に臨時博覧会事務委員を任命し、12月7日に委員会を開きます。この委員会により、奈良県のシカゴ万博への出品物の種類と数量及び事務的な取り扱いが協議されました。



臨時博覧会事務委員の任命 (同上)

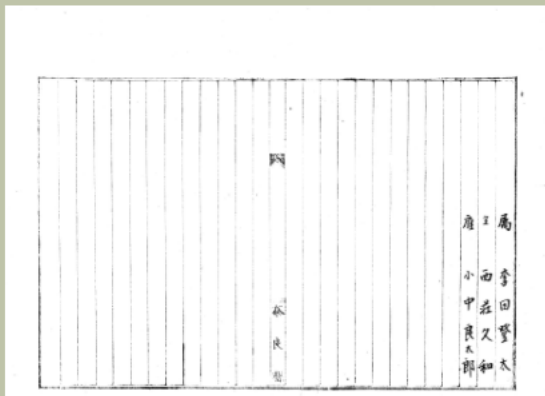
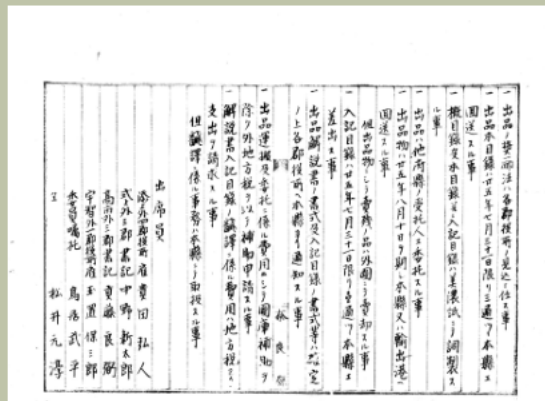


世界博覧会エ出品ノ件ニ付協議 (同上)

奈良県からは、米・茶・繭・生糸・木材標本・棕櫚縄・棕櫚皮・森林方案・彫刻物・製墨・団扇・織物・漆器・銘酒・鉱石荒銅丁銅・紙・仕込杖・素麺・澱粉類・生漆・葉煙草・ピン・膠の23種が出品されることになりました。この決定

にもとづいて、当初は奈良県より52名の出品者が予定されました。しかし全国的な出品奨励により総量が大幅に超過したため、博覧会事務局は方針転換をおこないます。最終的に奈良県からは18名の出品者にとどまったようです。

委員の名前に注目すると、奈良博覧会社社長の鳥居武平や、明治21(1888)年のバルセロナ万国博覧会で銅牌を受賞している松井元淳の名前がみえます。また属(奈良県職員)として名前がある李田登太や西荘久和は、後に奈良市長になる人物です。



世界博覧会エ出品ノ件ニ付協議 (同上)

【参考文献】

- 佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣 2015
(請求記号: 606.9- サノマ ID: 111291090)
- 長野県立歴史館編『殖産興業と万国博覧会』長野県立歴史館 1997
(請求記号: 606.7-102 ID: 111017518)
- 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館 2008
(請求記号: 606.9- イトウ ID: 111138845) ほか

ちよつと深めるシート③

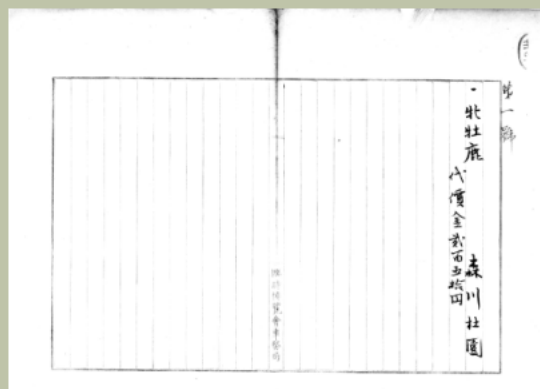
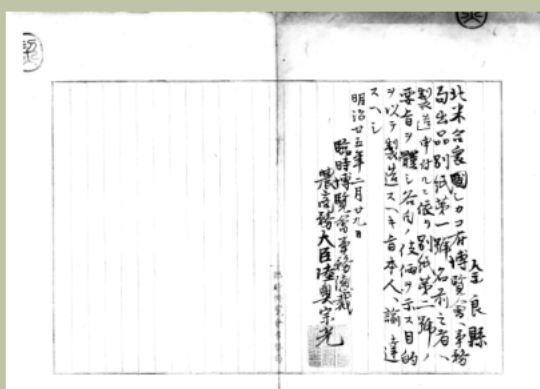
2-2. 美術品及美術工芸品

シカゴ万博に参加するにあたって、博覧会事務局は、出品物が万博の美術館に展示されることを大きな目標としました。これまでの万博において、日本の出品物は工芸品として一定の評価を受けていたものの西洋的な美術品とは認識されず、美術館に展示されることはありませんでした。

米国事務局との綿密な交渉の結果、日本側の主張が全面的に認められ、日本の美術認識に沿った展示が許可されます。これにより、博覧会事務局は、国内の工芸家や画家に直接製作を依頼し、質の高い作品の収集につとめました。集められた作品はさらに事務局の鑑査を受け、万博の美術館で展示される作品60点が選定されました。

この博覧会事務局主導の出品を「事務局出品」(政府の出品)といい、奈良県出身の彫刻家、森川杜園(以下、杜園)が製作した「牝牡鹿」も、この「事務局出品」に相当します。奈良県庁文書には、博覧会事務局の依頼から出品に至るまでのやりとりが綴られています。

明治25(1892)年2月29日、博覧会事務局は、杜園へ、「牝牡鹿」の製作を代価250円で依頼します。

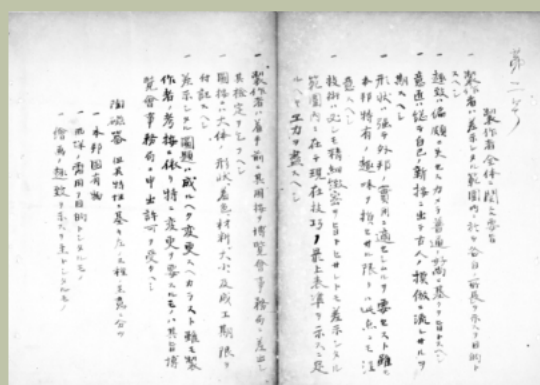


シカゴ博覧会へ事務局出品製造申付る論達
(「自二十四年至二十七年 博覧会一件」内務部第二課農商係
請求記号:1-M24-28d ID:556000800)

さらに続く添付文書では、下記のような細かい指示が記されています。

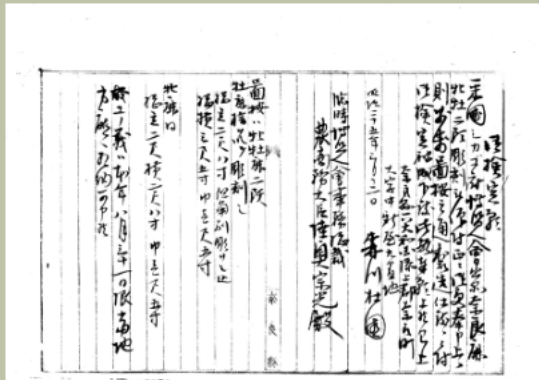
- ・各自の長所を示すこと
- ・趣味に偏らず普通の好尚に基づくこと
- ・意匠は新案に基づき模倣にしないこと
- ・日本特有の趣味を損なわない限り、形状が外国の実用に適するか注意すること
- ・必ずしも精細緻密であることを第一にしないでよいが、今の技巧の最上標準を示すこと

その上で、着手前に図案を博覧会事務局へ差し出すこととしています。



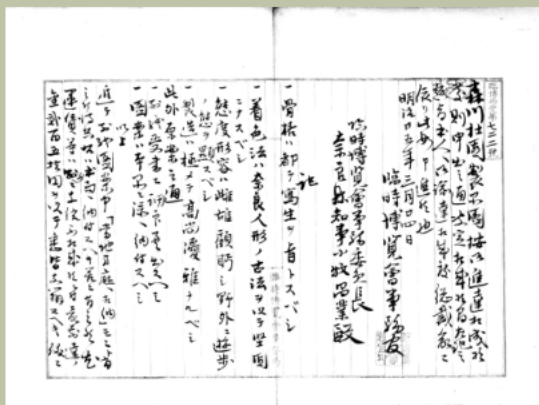
製作者全体に関する要旨(同上)

依頼を受けた杜園は、12日後の3月12日には、事務局総裁宛に検定願と彩色した図案を送付しました。



牝牡鹿検定願及び図案（同上）

さらに12日後の3月24日、事務局より、杜園の願と図案を検定した結果が届きます。そこには、



- ・写生を第一とすること
- ・奈良人形の古法を守ること
- ・野外に遊歩する姿を表現すること

との具体的な指示とともに、作品が完成したら直接事務局へ納めるようにとありました。この後、杜園は事務局の指示通り製作にとりかかり、9月12日に完成させています。

行政文書を丁寧にみていくと、奈良県が博覧会事務局と杜園を仲介する役割を果たしたことがよくわかります。このため、双方の資料が添付資料として奈良県の記録に残り、全体の流れが把握できるのです。



牝牡鹿

（東京国立博物館 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0046989> より改変）

「事務局出品」としてシカゴ万博に出品された作品のいくつかは、現在、東京国立博物館で所蔵され実物をみることができます。杜園の作品は鑑査の結果、万博では工芸館に展示されたようですが、杜園が先に提出した図案と実際の木彫を比べると、いかに図案通りに写実的に仕上げたかがよくわかります。

シカゴ万博の審査の際には、「デザインがうつくしく、また製作が良い」（「意匠美良ニシテ、且製作佳良トス」/『世界博覧会一件（Ⅱ）』）という理由で褒賞を受けました。

【参考文献】

東京国立博物館他編『世紀の祭典万国博覧会の美術』 NHK 他 2004
（請求記：702.06- トウキ ID:111273823）
東京国立文化財研究所美術部編『明治期万国博覧会美術品出品目録』
（請求記号 703.8- トウキ ID:111075072）ほか

ちょっと深めるシート④

くほた べいせん 3. 久保田米僊

『閣龍世界博覧会美術品画譜』

久保田米僊（以下、米僊）は、嘉永5（1852）年に京都錦小路東洞院の料理屋の長男として生まれ、鈴木百年に師事した京都画壇を代表する画家です。日本画家でありながら、西洋絵画にも関心を示し油絵を学んだといひます。

シカゴ万博に際しては、自らの作品「鷲ノ図」を出品するとともに、徳富蘇峰が創刊した『国民新聞』の特派員として渡米し、「世界大博覧会」を連載しました。また、会場の建物や展示品をスケッチし、帰国後に大倉書店より『閣龍世界博覧会美術品画譜』（全四冊、以下『美術品画譜』）を出版します。

今回の展示では、『美術品画譜』のうち、当館が所蔵している第1～3集を紹介しています。

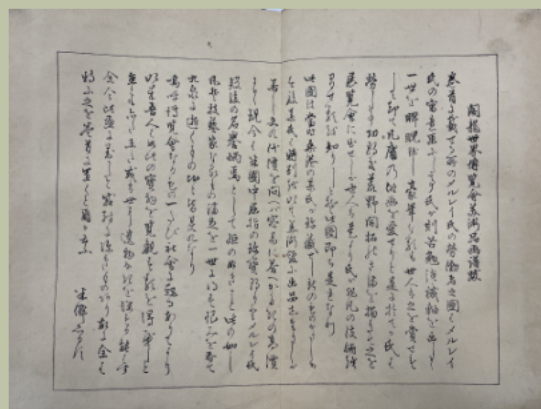


第壹集表紙

（久保田米僊著画『閣龍世界博覧会美術品画譜』第1集 大倉書店 1893
請求記号 708-47-1 ID:151220013）

米僊は『美術品画譜』第1集のあとがきで、ミレーの「鋤に寄りかかる男」の絵についてふれ、「米國中屈指の珍宝なり」と説いた上で、「博覧会というものが開かれるようになったので、自分もこのような宝物を観覧することができた」（「博覧会なるものの一た

び社会に起るありてより、以来吾人も如此の宝物を観覧するを得」と述べています。



第壹集跋（同上）

また、米僊による工芸館のスケッチと実際の写真を比べるといかに正確に描かれているのかがわかります。



工芸館日本物品陳列場
（同上第2集 請求記号:708-47-2 ID:151220012）



工芸館内日本部

（『臨時博覧会事務局報告附属図』 臨時博覧会事務局 明28.5
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13706442> を改変）

さらに、今でいうパビリオンとして、会場内には、宇治の平等院鳳凰堂を模した鳳凰殿が建てられました。鳳凰殿は三棟続きの建造物で、日本美術を展示するスペースも兼ねていました。

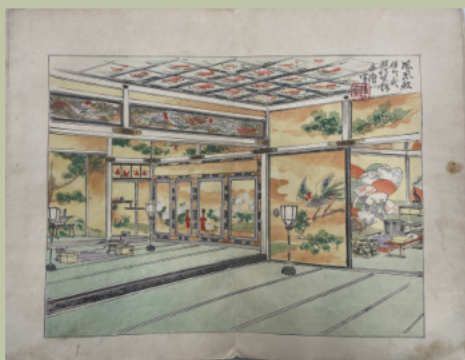


鳳凰殿 (同上第2集)



鳳凰殿
(同上『臨時博覧会事務局報告附属図』を改変)

各棟の内装は、それぞれ平安時代・室町時代・江戸時代の特徴を取り入れており、日本の歴史的な変遷を示しながら、日本の美術を紹介する役割を果たしました。米僊はその内装を精密にスケッチしています。



鳳凰殿徳川氏時代装飾
(同上第3集 請求記号:708-47-3 ID:151220011)



鳳凰殿室町時代装飾
(同上第3集 請求記号:708-47-3 ID:151220011)

シカゴ万博閉幕後、鳳凰殿はシカゴ市に寄贈され、ある時期には茶店などが営まれていたといえます。しかし昭和21(1946)年、放火のため焼失してしまい、残念ながら、現在その姿をみることはできません。

その後の米僊についてみると、万博翌年の明治27(1894)年、画家として日清戦争に従軍し、『日清戦闘画報』を出版しています。日本画家の枠にとどまらず、今でいう報道写真家兼ジャーナリストのような役割を果たした人物だといえるでしょう。

【参考文献】

大谷正・福井純子編『描かれた日清戦争』創元社 2015
(210.65- オオタ ID:111287572) ほか

ちよつと深めるシート⑤

4. 大塚卯三郎の報告

明治25(1892)年12月、奈良県は、万博への出品にかかわる現地での業務を、東京にある閣龍中央博覧会協会に委託することにしました。府県によっては、出品人が代表して渡航し、直接展示や販売に携わる場所もありましたが、奈良県は業者に委託することにしたようです。

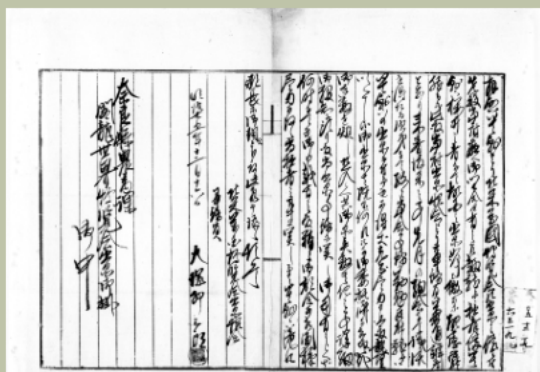


中央博覧会協会へ委託

(『廿四年 市俄高博覧会』 内務部第二課農商係
請求記号:1-M24-29d ID:556000802)

委託先を検討している過程で、奈良県は大阪の北米万国博覧会出品協会の事務員であった大塚卯三郎と接点を持ちます。

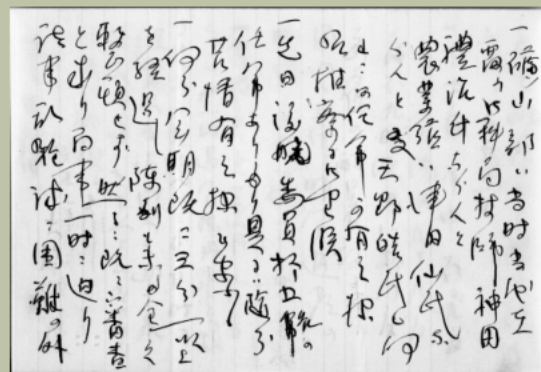
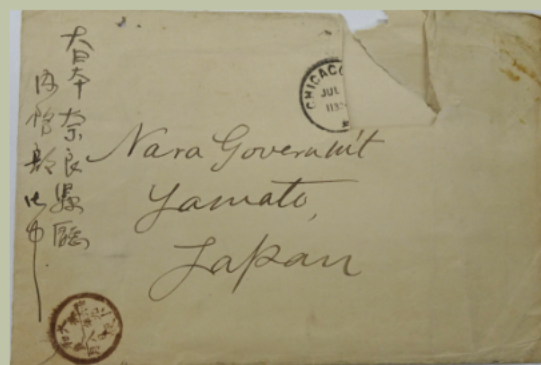
卯三郎は、自身を桜井の出身と説明し、「大阪府出品協会の事務員兼通訳者として、来春渡米する予定なので、奈良県下の出品についても尽力したい」(「当府出品協会ニとり事務員兼通辞者となり来春渡米之事(中略)、就而ハ貴県下の出品に付ても、可得丈充分尽力申上度」)との書翰を奈良県に送っています。



万国博へ出品につき大塚卯三郎書翰(同上)

『奈良縣現代人物誌』によると、卯三郎は明治3(1870)年に奈良県桜井町に生まれ、郡山中学を卒業したあと東京高等商業学校(商科大学、現在の一橋大学)に進学しました。英語・フランス語・スペイン語に精通していたため、22歳の若さでありながら大役に抜擢されたと思われます。

奈良県は、卯三郎が所属する北米万国博覧会出品協会に出品業務を委託することはありませんでしたが、卯三郎個人には、現地での奈良県の出品物の監督を委託したようです。奈良県庁文書中に、現地の博覧会の状況を、臨場感あふれる筆致で奈良県に報告する、卯三郎の書翰が計6点綴られています。



明治26.7.10 大塚卯三郎書翰(同上)

7月10日の報告では、「会期はすでに三分の一を過ぎたのに、まだすべてきれいに展示できていない、それなのに審査になり、全部が一度に迫り混乱している」（「会期既に三分の一以上を経過し、陳列未タ全く整頓せず、然るニ既ニ審査と成り、即事一時に迫り諸事乱雑体」）と語っています。

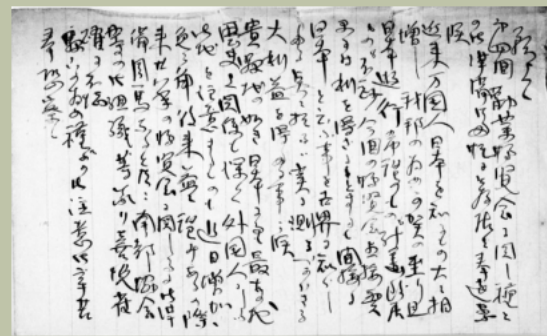
これ以前の書翰でも、会場がせまく、出品物の展示ができないことを何度か報告していましたが、開会から2ヶ月経った7月にいたってもまだ混乱している様子がみえます。

続いて8月15日の報告では、審査についてふれ、出品物が厳密に審査される緊張感あふれる様子を伝えています。審査は、種目ごとの担当審査官が会場を回って審査する形式で、卯三郎も出品物について積極的に説明をおこなったようです。その結果、奈良県からは最終的に16名が褒賞を授与されました。

關龍博覧会受賞者
（『世界博覧会一件（Ⅱ）』 内務部第二課農商係 請求記号：1-M26-24d ID:556000801）

シカゴ万博の期間中、展示スペースが狭すぎたり、非常に気温が高かったり、経済的な不況で出品物が売れなくなったりと苦労は絶えませんでした。しかしながら、卯三郎は、「博覧会は、利益を得られないとしても間接的には日本を世界に知らせるとい

う点において、実りははかりしれないほど大きな利益を得たようなものである」（「博覧会（中略）は利を得ざるとするも、間接に日本と云ふ事を世界に知らしめる点に於てハ実り測るへからさる大利益を得たる事に候」）と述べています。



明治 26.8.15 大塚卯三郎書翰
（同上『廿四年 市俄高博覧会』）

さらに、「貴県のように日本においても最古の地であり、歴史上関係も深く、外国人のなかでも此地に注目する者も追々増加し、往来がますます盛んになるでしょう」（「貴県地の如き日本にても最古の地、歴史上関係も深く、外国人にして此地を注意するものも追々増加し、兎二角往来益々望ある」）とし、奈良県の将来を予見しているかのようです。

卯三郎は実際にシカゴ万博にたずさわったことで、日本や奈良県を客観的にみるようになります。その視点は以後も積極的に活かされ、次に続くパリ万博やセントルイス万博でも活躍しました。

【参考文献】

奥田信義『奈良縣現代人物誌』第1編 奈良新報社 1924
（請求記号：281-13 ID:151181787）ほか